

穎

いろく、にかど田のいなばふきみだる風におどろくむらすめ哉

〔藝藩通志五〕文政六年秋惠蘇郡高野山組十一村に兩岐の稻を生ず村々大抵稻一把に二穗の

物、必二三莖あり寒地惡處かく瑞穂の多く出るは希代の祥なれば、里正等采りて、これを進獻せ

しを、又社稷の神に納めらる、

〔類聚名義抄三〕穎反、穂、穎 禾穎、カヒ

〔伊呂波字類抄加〕穎カヒ 穎穂 稗已上同、穀皮也

〔段注說文解字上〕穎禾末也、穎之言莖也、穎也、近於采及貫、於采者皆是也、大雅實穎實粟、毛曰、穎

三百里、穎、穎又去穎也、四百里入粟、五百里入米者、遠綱輕也、禮器稟、穎之設、鄭注、穎去實曰、穎、穎與

穎同物、鄭注、尚書曰、去穎、謂用其也、注禮器曰、去實、謂用其穎也、史記曰、錐處囊中、穎脫而出、非特

其未見而已、少儀、刀卻、刃授穎、是則穎在錐、則卻於末、芒在刀、則卻於穎、從禾頃聲、余頃切、詩曰、禾穎穉穉、

大雅生民、列者、梁之畷、借禾穰也、此穎通穰言、之下章、穎之畷、借字、古支耕合、

〔倭訓栞前編六〕かひ 日本紀に牙字をよめり、芽に同じ、甲の音轉もあり、日本紀の龜鹿火を古事記に荒甲に作れり、字書にも甲は草木初生の孛子也と見えたり、○中穎字をよむ義同じ、

〔地方新書〕粃

永永ハ穎ノコト也、永モ穎モ同韻ナレバ、假借シテ、省畫ノ永字ヲ用ユルナルベシ、ナホキニ才

永ノ字ヲ假借シ、段ニ反ノ字ヲ用ユルト同シ、或云、永ハ穎ノ草體ノヘンヲ取リ、永ナルヲ、永トイカシ、○中略

永ハ普通ノ俗書ニ、永樂錢ヨリ起ルトスルハ當ラズ、未ダ永樂ノ年號ナキ時ヨリ永錢ノ號アリ、農政座右ニ、水府藥王院文書ニ、穎錢ト云コトアリ、又鎌倉八幡社人大伴忠雄ガ相模志料ニ、

永高ノ永、舊ハ穎ナルベシ、延喜式和名抄等ニ、穎稻又本稻本穎等ノ名アリ、終ニ田畠ノ高ヲ、何貫文ト云名ハノコリシナラント、

一段二百五十歩、一步二把ツ、ノ稻把ヲ刈リ出シ、此一把ヨリ二升ツ、ノモミヲ出シ、米トシ